中学校　音楽科　学習指導案

指導者　原　寛暁

日　　時　平成 29 年 10 月 14 日（土）第 1 限　9:30～10:20

場　　所　第 2 音楽教室

学年・組　中学校 1 年 A 組 40 人（男子 19 人　女子 21 人）

単　　元　器楽アンサンブル　表現の工夫

リコーダーアンサンブル「テキーラ」（The Champs／原寛暁　編曲）

目　　標　1. グループで協力し効果的な表現を工夫する。（音楽的な感受や表現の工夫）

2. 意見交流を元に，より良い演奏表現を探る。（表現の技術，鑑賞の能力）

3. アンサンブルを意識し，堂々と表現する。（音楽への関心・意欲・態度）

指導計画（全 6 時間）

第一次　教材の全体練習　3 時間

第二次　中間部の例示・グループ練習　4 時間

第三次　中間発表・意見交換・最終発表　3 時間（本時 1/3）

授業について

この指導計画で扱う教材は，ラテンとしてよく耳にする機会の多い楽曲である。陽気な曲調を持ち，楽しく活動が出来ることが期待できる。また，中学校 1 年生はアルトリコーダーを手にして間もなく，演奏技術も初歩段階の生徒も多い。この楽曲は旋律も伴奏も 1 つのパターンを繰り返し演奏できるため，初心者にも理解しやすい。また今回は中間部にグループ毎に自由に表現を工夫できる箇所を設定し，この部分を主に相互鑑賞・評価の対象としている。対象クラスは歌唱にも意欲的に取り組めるが，器楽活動においては個人差がやや著しい。

グループでの協力や相互の教え合い，また授業者の支援（個人差を考慮した教材の編曲も含む）によって，色々な技術水準にある生徒たちがそれぞれ活動に参加し，楽しみながら高め合える授業を目指したい。

題　　目　中間発表　～　堂々と発表し，他のグループの演奏から学ぼう

本時の目標

1. グループで協力して，堂々と表現する。（音楽への関心・意欲・態度）
2. 他者との意見交流を元に，より良い演奏表現を探る。（表現の技術，鑑賞の能力）

本時の評価規準（観点／方法）

1. グループ練習の成果を，堂々と発表できたか。（演奏聴取）
2. 他グループの演奏を適切に評価し，相互の高まり合いの参考となるよう意見交流ができたか。（演奏聴取／演奏に関する感想ワークシート）

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
楽器準備 **＜導入＞** **本時の流れの確認** （形態：全体） グループ別に分かれる **グループ確認作業** （形態：グループ 学習：グループ）	・黙想 ・前時のワークシートをリーダーが受け取る ↓ ・ワークシートの記入内容を確認する。 ・中間発表に際しての注意事項を，グループ内で共有する。	・発表準備を支援 ・本時の流れの板書指示 ・授業者はグループを巡回し，適切な準備が行われるように支援
＜展開＞ **中間発表** （形態：グループ 学習：全体）	・グループ練習の成果を生かし，協力して楽しく演奏する。 ・演奏間に，相互評価用ワークシートに記入する。 ・他のグループリーダー(2名前後)が演奏の評価を行い，全体で共有する。	・ここでは，授業者からの演奏評価は行わない。 ・グループの入れ替わり(舞台転換)を支援する。
＜まとめ＞ **相互評価用ワークシートをグループごとに閲覧する。**（形態：グループ 学習：グループ）	・他グループからの客観的な意見を，グループ全体で共有する。 （※時間があれば全体合奏） ・使った物品を片付け	・客観的な評価は貴重であること。次時は，評価を元にさらに良い演奏が出来るように練習を深めることを指示する。

〈準備物〉

ワークシート（自己評価・相互評価用　2種類），封筒（グループ分）

〈板書計画〉

今日の目標「堂々と楽しく発表し，他グループ演奏を良く聴いて適切に評価しよう」

① 中間発表に向け，グループごとの確認（10分）

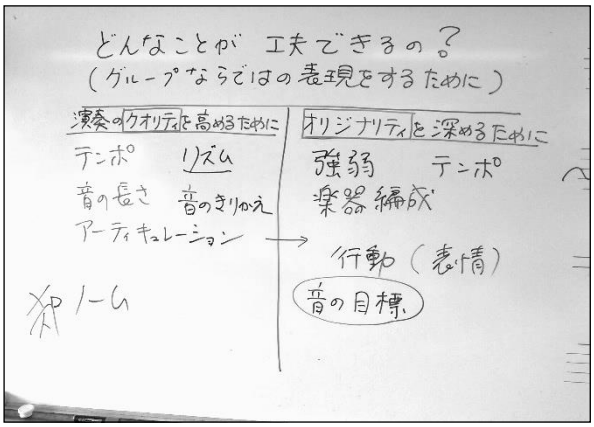
② 中間発表（A⇒B⇒C⇒D）　☆転換は，落ち着いて速やかに！（30分）

③ メッセージカード交換・それを元に「本発表」への目標を考える（10分）

※ 時間があれば，全体合奏

実践上の留意点

１．授業説明



この授業は，アルトリコーダー及び数種類の打楽器・伴奏楽器を用いたグループアンサンブルの取り組みを行う授業である。多くの生徒たちは，中学校に進学してからアルトリコーダーを購入し１学期から取り組み始める。多くの生徒たちは，小さなソプラノリコーダーとの演奏上の相違点に戸惑い苦労するケースが多いが，２学期に入るころには徐々に慣れ親しんでいく。

－生徒の工夫点の板書－

今回の取り組みでは，アルトリコーダーの技術的水準に関して意図的に段階をつけたいくつかのパートと，補助的に伴奏の出来るパートを用意した。加えて，中間部にグループ毎に工夫し表現する「空白部分」を設定し，楽曲創作にも取り組ませた。同じパターンを繰り返しながら成り立っている曲であるので，リコーダーに対する苦手意識を克服しながら表現の工夫が出来るように配慮した。

２．研究協議より

生徒たちはどのクラスも（学年３クラス共通で取り組みを行った）意欲的に表現を工夫し，楽しみながら技術的にも向上が見られた。中間部の工夫ポイントで，どんどんと自分たちで創作を進められたグループもあれば，かなり支援をしなければ成立しないグループもあり，その差異は比較的大きかった。支援の必要なグループに対して，より適切な手立て（手順）のシステム化をすることが，今後に向けての課題といえる。

また，研究協議では活動における“楽しさ”の具体化，取り組みのねらいの明確化，という面で的確なご指摘を頂いたことは，とても有益であった。今後の様々な取り組みに，生かしていきたい。

＜研究協議の内容＞

・どのチームの演奏も良かった。自然に手拍子がでる空気感が良い。

・学びに向かう力・人間性の育成を意図しているか？

→今回の取り組みだけでなく，全体の取り組みとして意識している。今回は特に，グループの表現の工夫を行っていく過程でのコミュニケーション（相互評価）を大切にした。

・１人ひとりの学びの過程をどう評価するか？

→授業の中で，取り組みのグループと個人評価の集計，加えてグループ毎の取り組みの過程の観察記録を累積，などを行っている。

・“楽しい”の具体，何がそうさせたかを追求すると良い。

・全員にこの時間につけたい力を明確にすると良い。学びの深さにつながる。

・授業者は，日頃から合奏などで生徒の talent をよく見て，自分で教材を作り上げている。

・創作的要素の導入やレベル別教材による支援などは，大切である。